

2025年度夏期コース 報告

大橋真貴子、高橋佳奈子、後藤恵利、白石恵利奈
松田さおり、川西由美子、杉松香苗、結城佐織

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下、IUC）は、9月から翌年6月に至る40週間の年間コース（以下、レギュラーコース）とは独立して、6月中旬から8月上旬までの期間に7週間の夏期コースを設置している。本年度（2025年度）の夏期コースは、2025年6月19日（木）より8月6日（水）まで実施された。本稿は当コースの報告であり、2章で2025年度夏期コースの特色、3章で教育活動、4章で受講者による評価、5章で今後の課題を報告する。

2 2025年度夏期コースの特色

IUC夏期コースの特色については、[スタンフォード大学IUC Summer Program](#)に次のように示されている。

- ・ Small class sizes (approximately six students), allowing for in-depth discussions.
- ・ A highly specialized student body, providing networking opportunities beyond those available at universities or graduate schools.
- ・ A prime location in Yokohama, offering easy access to major museums, art galleries, libraries, archives, and theaters, facilitating research and exposure to renowned works.

これらの詳細は佐藤(2023)および加藤(2024)にも説明されているため本稿では繰り返さないが、夏期コースの特徴を簡潔に言えばレギュラーコース同様、中・上級の日本語習得を目的とする、主として大学院生もしくは大学院進学を考えている大学生を対象としている点にある。新型コロナウイルス感染症による制約が解除されて完全対面授業に戻ってから本年度で3回目となり、コース運営も安定してきた。その体制を維持しつつ、高い専門性を持つ受講者を対象とするコースとするため何を改善すべきかを考える時期が来たとも言える。試行錯誤しながらコースの改善をしていくためには数年かかると思われるが、本年度は手始めとして募集書類の見直しを行った。本章では、その具体的な変更点について述べる。

2-1 募集条件の変更点

例年、IUCサマープログラムの応募者は、以下の書類を提出する必要がある。

- ・ Applicant information form (氏名や住所等の個人情報や専門分野の詳細を記載)
- ・ Degree Background Form (学歴や日本語・外国語学習歴を記載)
- ・ One confidential language evaluation submitted by your language instructor (言語指導講師による応募者の言語能力や授業態度に関する評価)
- ・ Transcripts (成績証明書)

2025年度は、これら従来の書類に加え、①Grammar test results (オンライン形式による語彙・文法テストの結果)、②Video Response (日本語での発話の様子を録画したスピーキング・テストの映像)、の提出を求めた。スピーキング・テストは、応募者が自分の考えを的確に伝えられるか、事象を適切に描写できるか、文章中の漢字が正確に読めるか、論理的に話を展開できるか、が判定できるような形式になっている。

この①と②を導入した背景には、過去の応募者の言語能力に著しいばらつきが見られたことがあげられる。特に以下のようなケースが確認されている。

- ・ 日本語の授業の受講経験はないが、日本滞在経験により日常会話は堪能な一方、読解に必要な語彙・文法知識が不足している者
- ・ 短期留学で集中的に文法を学んだが定着していない者
- ・ 日本語学習から長期間離れたため、即時に発話ができない者

こうした応募者が合格した場合、基礎的な語彙・文法力や会話能力の不足により、7週間のプログラムで十分な成果を上げることが困難となる。多くの応募者、特に大学院生は、自身の専門分野に関する文献の読解や日本語による議論を志望動機としている。しかし、基礎力が一定水準に達していない場合、コース修了時点で専門分野についてどうにか日本語で説明できるようになった、というレベルに達するにとどまる可能性が高い。

以上のことから夏期コースでは応募条件を追加し、専門性が高い受講生と勉強ができる日本語能力があるのかどうかを評価することとした。また、応募者自身が自己の言語能力を内省し、現時点で自己の目的を達成するのに相応しい時期かを判断してほしいという希望もある。なお、実施した結果、合格者の語彙・文法テスト得点とプレイスメントテスト得点の間には中程度の正の相関 ($r=0.465$) が認められた。ただし、本措置の効果については単年度の実施のみから結論を導くことはできず、今後も継続的な観察・分析が必要である。また、テストの指示や提示方法等の改善も検討すべき課題である。特に上記①②のテストには時間制限があるため、「合理的配慮」について事前に明示的な説明を提示する必要性があろう。

2-2 選考

応募書類は、日本語能力に加え、応募目的の明確性、専門性、学習態度等を基準として、主任および副主任によって総合的に審査された。日本語能力が高い場合でも専門性が不十分であったり、逆に専門性が高くとも日本語能力が伴っていなかったりした場合には、本

コースに参加する適切なタイミングではないと判断された。また、話し合いや発表も重視されるため、クラス授業への適応性も考慮された。

その結果、最終的に大学院在籍者25名、学部在籍者4名、社会人2名の計31名が受講することとなった¹⁾。受講者の多くは北米の大学に所属しており、専攻分野は言語学、宗教学、パフォーマンス、美術史、人類学、会計学など多岐にわたっていた。

3 教育活動

スタンフォード大学IUC Summer Programのホームページに書かれてあるように、夏期コースは以下の目標が達成できるよう設計されている。

- ・ The curriculum is structured to enable students to achieve the following goals:
- ・ Acquire and appropriately use honorific expressions and linguistic behaviors that are naturally accepted in Japanese society, adapting them accurately to different contexts.
- ・ Understand materials and literature related to their field of study and write logical, well-structured texts.
- ・ Deliver oral presentations on their area of specialization.
- ・ Engage in intellectual discussions with educated Japanese speakers on a variety of topics beyond their own field of expertise.

本章では、夏期コースの教育活動の概要を説明し、上記目標達成に向けて正課活動と準正課活動がどのように実施されたかについて報告する。なお、3-2における正課活動の詳細な報告は、各クラスの担任によって行われている。

3-1 概要

ここでは約7週間実施されたコースを概説する（参照：資料1）。

例年授業開始前にはプレイスメントテストと複数のオリエンテーションが実施される。主任と副主任によるオリエンテーションでは学習における注意事項や校外学習等の説明があり、クラス別オリエンテーションでは担任よりクラスの目標、教材・資料へのアクセス方法、課題の提出方法などが具体的に示される。さらに、ITオリエンテーションでは緊急時の連絡手段が、事務局オリエンテーションでは生活上の留意点が、受講者に伝えられる。

6月20日（金）には歓迎会が行われ、そこで受講者は一人一人自己紹介をし、専門分野や趣味などを共有した。これは同じような専門分野や興味を持つ受講者がクラスを超えて交流を深めるきっかけとなった。そして、6月25日（月）より約7週間にわたる通常授業が開始された。

通常授業は週5日、1日4コマ行われる。午前中に2コマ（第1時限10:00–10:50、第2時限11:00–11:50）、午後に2コマ（第3時限13:00–13:50、第4時限14:00–14:50）という構成で、

毎週金曜日の午後には準正課活動、講演会や校外学習が実施された。

授業開始から3週間目には中間試験、6週間終了時には期末試験が行われ、いずれも筆記試験と口頭試験によって受講者の理解度や到達度が判定された。試験後には、クラス担任より個別のフィードバックが提供される。

また、受講者が自身の関心に基づくテーマ（専門分野に関連する内容など）について、1人あたり15分の持ち時間で発表と質疑応答を行う卒業発表会が、7週目に開催された（参照：資料2）。最終日にはクラス担任との個別面談が行われ、夏期コース全体における学習の振り返りや発表会の講評、さらに今後の学習に向けた助言がなされた。

3-2 正課活動

受講者はコース開始前に受けた読解・漢字・文法・聴解のオンライン試験の結果と、初日に受けたライティング試験、漢字の筆記試験、口頭試験の結果に基づき、6つのクラスに分けられる。各クラスは5～6名で構成され、1名の担任に加えて、1～2名の副担任が指導にあたった。

教材選定に関しては担任が選んだが、中間試験前後に少なくとも一つは生教材を使用するよう主任から担任に依頼した。以下では各クラスの目標、時間割、教材、各担任のコメントの順で概略を述べる。なお、全てのクラスで『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』を使用したため、以下での記載は省略してある。

「夏空」担任：高橋 佳奈子 副担任：伊藤 拓人、加藤 紀子

【目標】

1. 読む

- ・効果的に読むための手がかりを知り、必要な情報を見つけられるようになる。
- ・論理的文章の構成を知り、学術論文を読むための基礎となる表現や文型が理解できるようになる。

2. 聞く

- ・ある程度の長さを持つ口頭発表やニュースなどを聞き取り、理解できるようになる。
- ・日常的な会話やディスカッションで、相手の話の要点を聞き取れるようになる。

3. 話す

- ・まとまった情報をわかりやすく伝えることができるようになる。
- ・人間関係や場面・内容に合った話し方ができるようになる。
- ・聞いたり読んだりして得た情報をもとに、あるテーマについて説明したり意見を述べたりすることができるようになる。

4. 書く

- ・適切な文型や表現や語彙を使って、内容や目的にふさわしい文章が書けるようになる。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	文法・漢字	文法・漢字	文法・漢字	文法・漢字	文法・漢字
11:00-11:50	読解	読解	読解・聴解	読解	読解
13:00-13:50	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現	準正課活動 課外活動
14:00-14:50	会話・ スピーチ	会話・ スピーチ	会話・ スピーチ	会話・ スピーチ	準正課活動 課外活動

【使用教材】

- ・友松悦子・和栗雅子 (2004)『初級日本語文法総まとめポイント20』 スリーエーネットワーク
- ・アカデミック・ジャパニーズ研究会 (編) (2015)『改訂版 留学生の日本語 読解編』 アルク
- ・伊勢英子 (2013)『チェロの木』 偕成社
- ・夏目漱石 (1903)『坊っちゃん』 青空文庫
- ・是枝裕和 (監督) (2015)「海街diary」 東宝
- ・是枝裕和 (2016)『映画を撮りながら考えたこと』 ミシマ社 など

【担任のコメント】

本クラスは、博士課程に在籍する学生2名、修士課程を修了した学生2名、次年度より修士課程に進学する学生1名で構成されていた。そのため、学術論文や研究計画書を読み、書く技能の向上に重点を置いた。コースの前半では、論理的文章の構成を知り、学術論文を読むための基礎となる表現や文型を理解できるようにするため、読解や文型の学習に重きを置いた。コース後半では、実際に研究計画書を書き、口頭発表の原稿を書くことに力を入れた。

「待遇表現」では、学生生活や社会生活における、様々な場面で人間関係や内容に合った話し方ができるよう、ロールプレイを重視した練習を繰り返した。その結果、場面に応じた待遇表現を使うことができるようになった。「会話・スピーチ」では、身近な話題から始め、次第に社会的な話題、専門的な話題へと発展させ、様々なテーマについて説明したり意見を述べたりすることができる能力が身に着いた。最終的には卒業発表において専門的な内容の口頭発表ができるようになった。

本クラスでは、学生の興味・関心に合わせ、教科書に沿った学習だけではなく、小説や映画、ニュース、テレビ番組等の生教材を積極的に取り入れた。来年度の課題としては、初級文法の後半に様々な文法項目を整理しきれない学生がいたため、より時間をかけて整

理・復習を行いたい。また、「待遇表現」でシャドーイングを取り入れ、聞く・話す能力の向上により力を入れたい。

(文責：高橋佳奈子)

「夏鳥」担任：後藤 恵利 副担任：長嶺 倫子、勝 成仁

【目標】

1. 読む

- ・新しい語彙や文型表現を学ぶ。
- ・短い新聞記事や小説、評論文を読めるようになる。

2. 聞く

- ・自然な速さの日本語を聞き取る力をつける。

3. 話す

- ・自分の意見を分かりやすく相手に伝えられるようになる。
- ・場面や相手に応じて、適切な表現が使えるようになる。

4. 書く

- ・話し言葉と書き言葉の使い分けができるようになる。
- ・読んだ内容やそれについての自分の意見を簡潔に書けるようになる。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	読解	読解	読解	読解	読解
11:00-11:50	読解	読解	読解	読解	読解
13:00-13:50	待遇表現	文法	待遇表現	文法	準正課活動 課外活動
14:00-14:50	発表と 話し合い	発表と話し合い テレビの日	発表と話し合い テレビの日	テレビの日	準正課活動 課外活動

【使用教材】

- ・ 凡人社 (2023) 『日本語学習者のための読解 厳選テーマ10 中上級』 凡人社
- ・ 友松悦子・和栗雅子 (2004) 『初級日本語文法総まとめポイント20』 スリーエーネットワーク
- ・ NHK (n.d.) 「藤子・F・不二雄 SF短編ドラマ」
- ・ NHK (n.d.) 「星新一の不思議な不思議な短編ドラマ」

- ・テレビ東京 (n.d.) 「正解の無いクイズ」
- ・NHK NEWS WEB・BBC NEWS JAPAN・長崎新聞ほか (n.d.) 「ニュース記事」 など

【担任のコメント】

コース目標は概ね達成された。学生が自身の弱点を意識できるようになったことは、大きな意義がある。授業では、学生同士が教え合う場面がたびたび見られた。社会人学生が授業内外でクラスメートに気配りしてくれたことは、本コースの学習環境の向上に寄与したと考える。

教材選定においては、語彙や表現、トピックが有機的につながるように工夫した。また、語彙クイズと文法クイズは繰り返し受験できるようGoogleフォームで提供した。

卒業発表会に向け、まず講師によるデモンストレーションを実施した。その後、各自が2回のミニ発表を行った。学生が発表経験を重ねる中で、内容を発展・洗練させ、自信を持って話す姿が確認された。

本コースでは、文章構成や接続表現、文末表現、待遇表現の指導に注力した。これにより、長く複雑な表現力の向上を図った。今後は、初級文法の基礎固めと併せ、中上級文法指導の一層の強化が有効であると考えられる。

(文責：後藤恵利)

「夏山」担任：白石恵利奈 副担任：千田昭予

【目標】

1. 読む

- ・オノマトペを通して、文章をより深く理解することができる。
- ・上級レベルの文章や小説等が読める。
- ・上級レベルの文章を読むのに必要な漢字、語彙の知識を身につける。

2. 聞く

- ・ニュースの型に慣れ、情報を聞き取ることができる。

3. 話す

- ・場面や相手との関係に応じて適切な表現を使える。
- ・日本語らしい、発音、アクセント、イントネーションを身につける。
- ・自分の意見を適切な表現を使って主張できる。

4. 書く

- ・メール特有の表現を理解し、実際のメールで使える。
- ・自分の意見を短くまとめて書くことができる。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現
11:00-11:50	文法	ニュース報告	文法	文法	ニュース報告
13:00-13:50	読解	読解	読解	読解	準正課活動・課外活動
14:00-14:50	討論	討論	討論	討論	準正課活動・課外活動

【使用教材】

- ・友松悦子・和栗雅子 (2004)『初級日本語文法総まとめポイント20』スリーエーネットワーク
- ・奥山貴之・宇津木奈美子・東会娟 (2020)『考える人の【上級】日本語読解』凡人社
- ・村田紗耶香 (2018)『コンビニ人間』文春文庫
- ・星新一 (1971)「おーい でてこーい」『ボッコちゃん』新潮文庫 など

【担任のコメント】

クラスの目的について、どのレベルまで達成できたかは学生によって様々ではあるが、どの学生もプログラム参加前と比べ、クラスの目的に近づくことはできたと思う。

特に授業で気を付けたことは初級文法を固めることであった。漢字がわかるという理由だけで初級文法の学習をせずに日本語学習を進めてしまった学生がおり、読めるのに、話せない、書けないという状況に陥っていた。また、日本にルーツがあり、日本語を使う機会が多い学生もいたが、彼らもまた初級文法は感覚的に身につけており、使い方があいまいな部分があった。そこで、初級文法の教科書を使い、同じ課の復習を繰り返したり、それでも足りない時は他の文法教材から同じトピックの課を部分的に使用したりすることで、これからの学習の土台となる初級文法を定着させた。

また、その他の取り組みとしては、毎日授業の最初に10分間の読書時間を設けた。中間試験までは日本の昔話を、中間試験以降は小学校低学年向けの本や学習漫画を自由に選んでもらった。漢字が不得意な学生からはストーリーを楽しんで読むことができ、読むことに対する抵抗感がなくなったという声があった。また、漢字が得意な学生はひらがなで書かれている本は読むのが難しく、漢字の読みを疎かにしていたことに気付いたようだ。絵を見てオノマトペの意味を推測することができるようになってきたのも良い変化だったのではないと思う。

このレベルの学生はどんどん先に進みたい気持ちがあるのではないと思うが、来年以降も同じような背景を持つ学生が集まったとしたら、やはり初級文法の定着に時間を使う必要があるのではないと思う。ただ、それだけではストレスが溜まってしまうので、読解教材のレベルや使い方ですべてのバランスを取ることができると学生からの不満も出にく

くなるのではないかと考える。今回は読解の授業では主に教科書を使用し、最後の2週間のみ生教材を使うような進め方をしたが、そこまで教科書にこだわらずに学生の興味のあるトピックを選んでも良かったかもしれない。

(文責：白石恵利奈)

「夏柳」担任：松田さおり 副担任：篠崎佳子

【目標】

1. 読む

- ・中上級レベルの読解教材を正確に理解する力を身につける。
- ・文章の文化的・社会的背景を意識しながら読む力を養う。

2. 聞く

- ・ニュースなどでよく使われる語彙や表現を聞き取る力をつける。
- ・会話や場面に合った表現を理解できるようにする。

3. 話す

- ・状況に応じた自然な日本語で話す力を身につける。
- ・発表や討論の際に、定型表現や構成を使って意見を述べるようにする。

4. 書く

- ・文法的に正しく、わかりやすい日本語を書く力を養う。
- ・漢字や語彙を適切に使って、自分の考えを正確に表現できるようにする。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	文法	文法	文法	読む	読む
11:00-11:50	待遇表現	待遇表現	待遇表現	読む	読む
13:00-13:50	聞く	発表	聞く(学生報告含む)	漢字・語彙	準正課活動・ 課外活動
14:00-14:50	討論	話し合い	討論	文作り	準正課活動・ 課外活動

【使用教材】

- ・仲山淳子 (2021) 『日本語文法ブラッシュアップトレーニング』 アルク
- ・友松悦子・和栗雅子 (2004) 『初級日本語文法総まとめポイント20』スリーエーネットワーク
- ・瀬川由美ほか (2023) 『ニュースの日本語 聴解50 (中級後半～上級レベル)』スリーエーネットワーク

- ・目黒真実 (2009)『中上級学習者のための日本語読解ワークブック』アルク.
- ・朝日新聞 (2023.3.31)「(天声人語) 飼い主の責任」
- ・朝日新聞 (2025.2.5)「なぜ万博か、国威発揚の場は今——『植民地主義の権化』問う研究者、真の多様性『熟議を』」
- ・カンテレNEWS (2025.8.6)「【よのなかラボ】グランピングに熱視線！ 福祉連携型、廃校で農業、DIYで再生した廃村… 市場規模1000億円超えで加速する差別化 地方自治体も期待【報道ランナー】」
- ・NHK NEWS WEB (n.d.)「ニュース記事」 など

【担任のコメント】

夏柳クラスでは、設定した目的は概ね達成された。学生たちは積極的に授業に参加し、日本語で話すことへの躊躇が少なくなり、自信を持ってコミュニケーションを図る姿が見られた。一方で、「話す」「書く」といった運用面には依然として課題が残った。

授業では、文法の誤りを学生全員で直す「共同推敲」を取り入れ、反転授業の形式で自宅学習を活用し、生教材もほぼ毎回使用した。特に、学生からの質問に丁寧に対応することに力を入れ、学習意欲の維持と理解の定着を図った。また、学生同士の話し合いや発表準備にも重点を置き、能動的な学びを促進した。

来年度以降は、日本語に触れる機会をさらに充実させ、例えば教授に実際にメールを送る課題や、可能であれば日本人との交流の場を設けるなど、日本語力の一層の向上が期待できる授業も検討していきたい。

(文責：松田さおり)

「夏草」担任：川西由美子 副担任：伊藤拓人

【目標】

0. 総合面

- ・具体的および抽象的な観点で情報を把握し、表現し、話題や論点に一貫性を持たせることができる。

1. 読む

- ・多様なテーマ・ジャンルの文章が読める。精読・速読ができる。
- ・筆者の意図を理解し、構成を意識し、次の展開を予測しながら読むことができる。

2. 聞く

- ・日常的なやり取りやディスカッションで相手のニーズ・要点などを聞き取ることができる。
- ・ニュース・発表などで意図が理解できる。

3. 話す

- ・目的・文脈に応じ機能的に適切な表現、相互作用・談話管理（発言権の適切な取得や裏付け部分と主要論点の区別をつけるなど）のストラテジーを使うことができる。
- ・自分の経験を簡潔に雑談形式で始め、一定の長さ続けて、終え、叙述・描写ができる。
- ・相手の意見をまとめたうえで、自分の意見を簡潔に述べ、適切に問題提起ができる。

4. 書く

- ・目的・文脈に応じて適切な語彙・表現を使い、書くことができる。
- ・構成と議論の掘り下げにより論点が一貫した文を明確に書くことができる。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	出来レポ スピーチ 語彙表現	出来レポ スピーチ 語彙表現	出来レポ スピーチ 語彙表現	出来レポ ニュース 語彙復習	表現小テス トニュース 文法
11:00-11:50	読解	読解	読解	読解	読解討論
13:00-13:50	文法	発表・議論	発表・議論	文法など 復習	準正課活動・ 課外活動
14:00-14:50	待遇表現	待遇表現 メール	待遇表現	待遇表現 メール	準正課活動・ 課外活動

【使用教材】

- ・近藤安月子ほか（2006）『上級日本語教科書 文化へのまなざし』東京大学
- ・アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（2019）「文法ノート」 など

【担任のコメント】

読解内容や意見を述べる力を養うため、抽象概念と具体概念の区別を意識させ、定型表現の練習を重ね、目標を達成した。授業では、第1週に学習を助ける方法としてシャドーイングの意義や実現可能な目標の立て方を紹介し、学生自身に目標設定と調整、実行を促した。

また、毎朝の雑談練習で出来事を簡潔に共有する時間を設け、読解や発表では、理解した内容をその場で複数回自分の言葉で言い換えたり書かせたりした。学生の集中力維持のため、立ち上がったの会話練習（特に待遇表現）も取り入れた。

定期試験や卒業発表を目標に据え、早期から準備を開始し、意識を高めることで目標達成へと導いた。今年は合同クラスでのゲームを学生主導で実施し、実践的な日本語での説明や質疑応答の機会を創出し、母語話者も招いて日本語でゲームを行った。

今後は、多読形式で読書とその内容紹介・解説を取り入れることで、学生のモチベーションを高めた発話練習につなげたい。

(文責：川西由美子)

「夏海」担任：杉松香苗 副担任：市川佐保子・橋本佳子

【目標】

1. 読む
 - ・多様なジャンルの文章を読み、内容を理解する。
2. 聞く
 - ・報道番組等を視聴し、内容を把握する。
 - ・話し合いの中で他の人の意見、その根拠等を正確に聞き取る。
3. 話す
 - ・テーマに沿った話し合いの場面で適切に自分の意見が言えるようにする。
 - ・様々な会話の場面で、相手、内容などに配慮して表現を使いわける。
4. 書く
 - ・論理的な文章構成を意識しながら、自分の意見等を400～600字程度の文章にわかりやすくまとめる。
 - ・最終的に3000字程度の発表スクリプトを書く。

【時間割】

	月	火	水	木	金
10:00-10:50	場面別 会話練習	場面別 会話練習	場面別 会話練習	場面別 会話練習	場面別 会話練習
11:00-11:50	文法	文法	文法	文法	論文の書き方
13:00-13:50	読解	読解	視聴	読解	準正課活動・ 課外活動
14:00-14:50	読解	読解	視聴	読解	準正課活動・ 課外活動

【使用教材】

- ・小川誉子美・三枝令子 (2019)『日本語文法演習 ことからの関係を表す表現 一複文一 改訂版』スリーエーネットワーク

・浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997)『大学生と留学生のための論文ワークブック』
くろしお出版

【担任のコメント】

夏海クラスのカリキュラムは、待遇表現の習得のための会話練習、文法の復習に加え、文章や動画の内容を理解し、それに基づく話し合いを通して口頭運用能力を高めることを目的として構成した。扱った文章は、日本の歴史・文化や現代日本社会の課題など幅広いジャンルから選び、抽象度の高い話し合いができるよう配慮した。学生は熱心に参加し、自分の意見をしっかり述べていた。

コース後半では、各学生が文章を自分で選び、その内容を日本語で説明し、他の学生からの質問に答えながら話し合いを進める、学習者主体の活動を取り入れた。これにより、学生は達成感を得ると同時に、自分の弱点を自覚し、今後の学習につなげられたのではないだろうか。待遇表現の会話練習では、実際のロールプレイに加え、配慮が必要な場面に関する経験や疑問を共有し、より深い理解を促すことができた。

今後は、話し合いにおいて互いの意見を尊重し、より良い結論や相互理解、合意形成を目指す建設的なやりとりができるよう指導したい。

(文責：杉松香苗)

3-3 金曜日午後の活動

例年、夏期コースでは金曜日の午後に校外学習(4回)および講演会(1回)を実施してきた。しかし、加藤(2024)が指摘するように、近年は「熱中症警戒アラート(熱中症警戒情報)」が頻繁に発令され、教職員および受講者の安全確保の観点からも屋内で実施可能な活動を増やす必要性が高まっていた。また、大学院生が多数を占める状況においては、屋内での日本語学習やクラス間交流を促進する活動の拡充がより望ましいとの意見も講師からあがっていた。こうした背景を踏まえ、今年度は校外学習を原則1回(クラスによっては2回)にとどめ、講演会やワークショップ、クラス活動など屋内活動を中心とする方針を採った。

「講演会(6月27日)」

日本舞踊中村流八代目家元・二代目中村梅彌氏を招き、日本舞踊の解説および舞踊体験の指導を受けた。

「鎌倉の日(7月4日)」

全員で鎌倉・建長寺において坐禅を体験後、午後は各クラスに分かれて希望の訪問先を巡った。行き先や昼食場所は受講者が主体的に決め、鎌倉大仏殿高德院、長谷寺、鶴岡八幡

宮、鎌倉文華館鶴岡ミュージアム、報国寺などを訪れた。

「専門別活動（7月18日）」

本年度初の試みで、受講者間交流や卒業発表に向けたスライド活用の効果を体験することを目的とした。金曜日担当講師が50分の枠で自身の専門や特技に関する発表を行い、その後ディスカッションやアクティビティを実施した。テーマはビジネス日本語のカタカナ語、当て字・熟字訓、日本語の音変化、書道、小説、共生社会の在り方、2023-24年度卒業生による尺八演奏など多岐にわたった。

「クラス別活動（7月25日）」

クラス内の親睦を深めることを目的として、各クラスが主体的に企画した活動を実施した。活動内容は多様で、教室外で美術館や資料館を訪れたクラスもあれば、二クラス合同で「人狼ゲーム」を行ったクラスもあった。

「クラス活動（8月1日）」

翌週に予定されている発表会に向けた練習や、録画映像の視聴など、各クラスにおいて活動が実施された。

3-4 その他の活動

準正課活動として「バートン所長のクラス訪問」および「会話パートナー」も行われた。前者は、バートン所長が各クラスを訪問し、50分程度受講者との交流を図るものである。この活動では、主に受講者からの質問に所長が答えるという形式が取られており、質問の内容は多岐にわたる。IUC所長としての日々の業務やこれまでの経験に加え、日本研究者としての歩み、現在の日本社会に対する所見、さらには趣味である写真に関する話題まで、幅広いテーマが扱われていた。

「会話パートナー」は会話力の向上が必要だと担任が判断した受講者と、IUCのレギュラーコースで勤務する教材助手およびボランティアで参加した日本語教育に関心を持つ近隣の大学の学部生と院生（計5名）が、パートナーとなって、一対一で会話の練習をする活動である。これは週一回、一回20分間、対面かWEB会議システムZoomで行われ、計23名の受講者が参加した。

3-5 教育活動における安全管理

受講者には、コース開始直前に事務局より「Life in Japan」と題されたPDF冊子が電子メールにて配布される。同冊子には、医療機関の一覧、緊急時の対応方法、地震への備え等が英語で記載されており、来日直後の受講者が安全かつ円滑に生活を開始するための実

用的な情報が提供されている。

また、IUCが位置する関東地方では、例年夏季に台風の接近・通過があることから、本コースにおいても台風発生時の対応方針をあらかじめ策定している。特に、受講者および教職員の安全を最優先とし、気象状況に応じて迅速にオンライン授業への切り替えが可能となる体制を整備している。

4 受講者による評価

今年度の受講者による評価は、Google Form を用いて、8月1日（金）に受講者にメールで送信し、8月8日（金）23:39を提出締め切りとした。31名中、21名から回答があった。質問項目は、A.プログラムの全体評価、B.プレイスメントテスト、C.（IUCからの）情報提供、D.クラス授業、E.準正課活動、F.教職員へのコメント、G.奨学金、H.生活面に関するもので、言語は英語で実施された。本稿では紙幅の都合により、今後の課題となるものを中心に報告する³⁾。

4-1 プログラム全体への評価

プログラムの全体への評価はExcellent（12人）、Good（8人）、Fair（1人）であった。高評価の理由として「大変だったが、それに見合う成果があった」「短期間で多くの内容を効率よく学べる構成となっている」「先生の質が非常に高く、指導する先生の姿が印象的だった」「日本語しか使わない指導方針の効果を実感した」というように、密度の高い指導と成果への満足度の高さが表れている。一方で、「日本での交流の機会がもっと欲しかった」「意見表現のフレーズを早い段階で教えて欲しかった」「漢字学習の扱いが軽く、手書きの練習も授業内で行ってほしかった」というように授業構成に関する改善点も指摘されている。Fairを選んだ受講者はその理由として「学習効果は感じているが、課題の提出方法が不便だった」ことを挙げている。これは全クラスで採用しているGoogleクラスルームの使い方に慣れなかったためと思われる。

サマーコースを他の日本語学習者に推薦するかどうかという質問に関しては、一名の無回答者を除く全員がYesと答えた。

4-2 プレイスメントテスト・情報提供への評価

オンラインテストに関しては、Excellent（7名）、Good（12名）、Fair（1名）、Poor（1名）であった。批判的なコメントとしては、「リーディングと漢字は簡単すぎた」「ビデオ録画は少しやりにくかった」「試験の量が多すぎると感じた」「フィードバックがほしかった」というものがあった。また、オンライン試験へのアクセスが非常に困難だったというコメントもあった。

夏期コースが始まってから受験したプレイズメントテストに関してはExcellent (7名)、Good (11名)、Fair (3名) で、「テストの難易度はちょうど良く、内容も網羅的であった」というコメントがあった一方で、「漢字の書き取りは優先度が低いと思う」「テストで漢字の書き取りを重視していたが、授業ではそれが扱われていなかったのは矛盾している」というようにテストと授業内容の整合性についての指摘もあった。また、「クラス分けに満足」した受講者もいたが、「テストがクラス分けに使用されたかどうか不明瞭で、他の受講者とのレベル差を感じた」という受講者もいた。

授業開始前のオリエンテーションに関して「十分であった」(20名)が多かったが、他に欲しい情報として「日本に不慣れな受講者向けに地震などの緊急事態への対処方法をもっと詳しく説明してほしい」「地元イベントに関する情報がもっと欲しい」という防災やイベントの情報の充実を求める声もあった。

4-3 クラス授業・発表会への評価

Excellent (11名)、Good (10名)であり、「自分のレベルに合っており、成長につながった」「文法ミスをその場で指摘してくれるのが役立った」「ディスカッションが多く、テーマが豊富であった」「教材と関連する記事や例を授業で取り上げてもらい、興味深かった」と指導法を評価するコメントがある一方、「授業構成は良かったが、一部のペアワークで発話量に差があった」「クラスメートとのレベルに違いがあり、自信を失うこともあった」というように自身と他者と比べて、習熟度差への配慮を求める声もあった。

宿題の量と質についてはExcellent (11名)、Good (7名)、Fair (2名)、Poor (1名)で、「量が多いが、それが価値のある経験だった」「バラエティ豊かな宿題に感謝している」「授業と連携していて実践的だった」と内容を評価する意見がある一方で、「もう少し作文の練習が欲しい」「内容は有益だったが、一部の宿題に時間がかかりすぎた」「毎日寝るまでやっても終わらず、体調を壊した」というように宿題の内容や量についての言及もあった。量に関しては講師も考慮しており、「開始当初は量が多く感じたが、後半は調整されていた」というコメントもあった。

教材に関しては、Excellent (14名)、Good (7名)であったが、「もっと学術的な文章を増やしてほしい」という意見も目立った。

中間・期末試験の内容・指導法・フィードバックに関する評価はExcellent (9名)、Good (9名)、Fair (3名)で、改善点を求める声としては「期末試験は中間より記述量が多いのに時間は同じで、時間配分が難しかった」「教科書の内容を使った問題が多く、理解よりも暗記に偏る可能性がある」「試験に手書きが含まれるなら、授業でも手書きを取り入れるべき」「中間試験はフェアだったが、期末試験は難しすぎて授業内容と乖離していた」などが挙げられる。授業や試験のフィードバックに関しては「毎週のオフィスアワーでプレゼンに関して十分なフィードバックが得られた」「試験後すぐに授業で内容を復習する

のは非常に有益だった」というように満足度の高いコメントが多かった。

最終発表に関する評価はExcellent (8名)、Good (11名)、Fair (2名)で、「少人数グループ+他クラス混合で緊張が軽減された」「録画されることで自分のスピーチを後から見返せるのが良い」と評価するコメントがある一方で、「発音やイントネーション、発表マナーの練習時間がもう少し欲しかった」「発表準備に時間がかかりすぎて、期末試験の復習時間が減ってしまった」「一部の発表が専門的すぎて、語彙リストだけでは理解が追いつかなかった」というように、日程の再検討や聴衆への配慮を求めるコメントもあった。

講師は夏期コース中、受講者の習熟度やニーズに応じて授業内容を柔軟に調整し、発表会直前まで受講者の発表練習に対応した。こうした熱意が受講者に伝わり、コース終了時には受講者が講師に感謝の言葉を述べていた光景が見られた。

4-4 準正課活動への評価

準正課活動の評価をまとめると次の通りである。

- ・講演会：Excellent (10名)、Good (9名)、Poor (1名)
- ・鎌倉の日：Excellent (9名)、Good (7名)、Fair (4名)
- ・専門別活動：Excellent (10名)、Good (8名)、Poor (1名)
- ・クラス別活動：Excellent (17名)、Good (3名)、Fair (1名)

今年度初めての取り組みである「専門別活動」については「発表の理解が少し難しかったが、面白かった」「難しいテーマだったが、分かりやすく発表されていて良かった」と満足度が高かった。最も評価が高かった「クラス別活動」で、受講者が中心となって企画実行できたこと、受講者間の交流を深められたことなどが理由として挙げられる。

また、「会話パートナー」に参加した受講者のうち15名が、Excellent (9名)、Good (6名)と評価しており、コメントにはパートナーへの感謝の言葉が記されていた。

4-5 生活面について

IUCに通学する以外に、どのような活動に参加したかという質問に対して、「花火大会や七夕イベント、多読会(NPO)やボードゲーム交流会に参加した」「週末に博物館や美術館を訪れた」「自分の専門に関する学術会議や学会に出席した」などの回答があった。受講者は横浜という地理的な利点を活かし、積極的に学術的・文化的な経験ができるイベントや、日本人と接点を持つ活動に参加していたようである。

多くの受講者が3~4時間程度の学習時間を授業以外に確保しており、4時間以上の受講者は宿題に加えて復習や漢字学習に取り組んでいた。ストレス発散・対処法としては「アニメを見たりゲームをしたりして、意識的にリラックス時間を作る」「同じように大変な思いをしている仲間と話したり食事をする」「ずっと同じ場所で勉強しているのは辛い。外に出て散歩や探検をする」ということが挙げられており、受講者それぞれが自分に合っ

た方法を模索しながらストレスを乗り越えていたことが伺える。また、「オリエンテーションでのバートン所長の『他人と比較せず、自分に集中せよ』というアドバイスが心の支えになった」「病気で孤独を感じたが、先生に連絡したら理解してもらったので安心した」というコメントが表しているように、助言によって前向きな姿勢を維持している受講者もいた。

5 今後の課題

本章では受講者からの評価とコース終了日に行った講師の反省会で出た意見を踏まえ、今後の課題の整理をする。特に、専門性が高い学習者を対象とした夏期コースに発展させていくために何が必要なのかを考えていきたい。

5-1 募集に関する課題

2-1および2-2で述べたように、今後も短期間で高い学習成果が求められる本コースにおいて、一定の基礎的能力を備えた、専門性の高い受講者が参加できるよう、より適切な募集・選考方法の構築を検討していく必要がある。

また、募集スケジュールについても再検討の余地があると考えられる。今年度は、応募締め切りを2月末日、合格発表を3月下旬、受講意思の回答期限を4月中旬と設定したが、一部の応募者からは、他の日本語プログラムにおいて合格発表および回答締め切りが3月初旬に設定されていることを踏まえ、本コースの日程も前倒しすべきではないかとの意見が寄せられた。さらに、奨学金の申請を必要とする受講予定者からは、受講意思表明までの猶予期間を現行の2週間ではなく、3~4週間に延長してほしいとの要望もあった。理想的なスケジュール案としては、応募締め切りを2月初旬、合格発表を3月初旬、受講回答期限を4月中旬とすることが考えられる。ただ、主任・副主任がレギュラーコースにも従事していることから、レギュラーコースの春休み(3月第2~第3週)に合否判定作業を集中させるほうが現実的であるとの意見もある。こうした見直しは、応募書類の整備や応募者リストの作成を担うスタンフォードオフィス、ならびに合否通知等をメールで発信するIUC事務局との連携・調整を踏まえて進める必要があろう。

5-2 情報提供に関する課題

コース開始前に配慮事項に関するアンケートを実施しているにもかかわらず、授業開始後に新たに配慮を要することが判明するケースがあった。今後は、受講者に事前申告の重要性を周知徹底させるとともに、IUC側においても関係者間で情報を適切に共有できる体制の構築が課題となろう。

また、日本国内で開催される学術的・文化的イベントに関する情報が受講者間で共有で

きる方法を整えることで、より充実した学習体験の促進につながると考えられる。一方で、週末に観光や登山などで遠方へ出かける受講者も見受けられたことから、自己責任に基づいた安全管理への意識啓発も今後の課題として取り組む必要がある。

5-3 クラス運営の課題

全体として受講者は積極的で協調性も高く、学びやすい環境が形成されていた。しかし一方で、受講者間の能力差が顕著なクラスも存在し、「読解は可能だが口頭表現が弱い」「発話は流暢だが正確な読解力に欠ける」といったギャップが授業進行に影響を及ぼす事例が見られた。また、学部生と大学院生が同一クラスの場合、大学院生の高度な議論展開に学部生が対応できない状況も確認された。こうした状況をなるべく避けるために、応募時の口頭試験やプレイスメントテストを通じて、受講者の発話能力・専門知識・論理展開力をより精緻に評価し、クラス分けの際の参考とする必要があるだろう。

5-4 発表会の課題

卒業発表に向けた準備方法については、ほとんどのクラスで、クラス内での発表練習や意見交換、発表テーマの決定、初稿の提出、発表練習といった段階的な取り組みを行っていた。一方で、発表会直前でのテーマ変更やスクリプトの提出遅延といった課題も見られた。全クラス統一した締め切りを設定し、その厳守を徹底することが必要だと考えられる。さらに、発表会当日は進行役(司会者)1名が司会進行や機材の操作などを一手に担う状況となり、負担が生じていた。人員体制に余裕があるとは言えないが、負担軽減をはかる仕組みづくりが必要であろう。

5-5 専門性を持つ学習者を対象とした夏期コースへの課題

IUCにおいては、10か月にわたるレギュラーコースと、個別指導を中心とするPコース⁴が設置されているが、大学院生にとってはそれぞれ異なる課題が存在する。具体的には、レギュラーコースには長期的な参加に伴う時間的制約がある一方で、Pコースでは個別の研究支援は提供されているものの、専門分野を越えた大学院生同士の相互交流の機会が限定的であるという点である。このため、短期間で集中的に日本語能力を向上させる手段として、IUC夏期コースを選択する大学院生の数が増えている。国内外に多様な日本語教育プログラムが存在するなかで、IUCが独自性を確保するためには、本コースが高い専門性を有する学習者同士の相互刺激を促進する場であることを強調すべきであろう。

今後このような方針を夏期コースの特色として明確に打ち出すとしたら、教育内容の精査と取捨選択が不可欠となろう。高度な専門性を有する受講者が限られた7週間という期間内で最大限の学習成果を得るためには、教育内容として「何を教えるか」「何をあえて教えないか」を検討する必要がある。例えば、毎年全クラスで必修とされてきた「待遇表

現」について、受講者から「高度な敬語表現は役に立つと分かっているが、現時点での優先度はそれ程高くない」という声も聞かれた。こうしたことから受講者の多くが希望する読解力の強化に、「待遇表現」で使っていた時間を充てることも一つの選択肢となりうる。また、受講者が自身の専門性に基づいて教材を選定し、それを基に説明や討論を行う活動をさらに導入することも検討に値すると考えられる。ただし、この場合、学習者の日本語能力を超える難解な教材や、他の受講者の専門分野との乖離が大きい教材を使用することにより、学習意欲の低下を招くリスクも存在する。そのため、講師には、新たな語彙や文法項目を効果的に導入しつつ、内容理解を適切に支援する能力が求められる。それとともに、受講者に対して自身の専門領域を越えて他分野へも関心を持つよう促す指導力も必要である。

今後、夏期コースが「高度な専門性を有する学習者を対象とした教育課程」であることを一層明確に打ち出していくのであれば、以下の点についての継続的な検討が求められるよう。(1) 専門性のみならず、一定の日本語能力を有する受講者の選抜方法、(2) 基礎的な文法知識の定着と応用力の育成を両立させる教育方法、(3) 必要な日本語技能の選別と優先順位の決定、(4) 講師に求められる教育的力量と指導法のあり方、である。

6 おわりに

現在、夏期コースではレギュラーコースの常勤講師が1年交代で主任を担当する体制が取られている。この体制は多様な視点を取り入れる利点を持つ一方で、継続性や方針の一貫性という課題も内包している。今後はコースの在り方について関係者間で継続的に議論し、より安定した運営体制の構築を模索することが望まれる。

また、本報告で整理したように、募集・選考方法、授業構成、発表会の運営など、今後に向けて改善すべき課題が複数明らかになった。これらを着実に解決していくことにより、夏期コースが「高度な専門性を有する学習者が短期間で集中的に力を伸ばす場」としての特色をさらに強化できるだろう。受講者から寄せられた積極的な評価や改善提案は、今後の教育活動を発展させる上で貴重な指針となる。

最後になるが、スタンフォードオフィスのスタッフからは募集業務に関する支援を、IUC事務局のスタッフからは行事運営、学生対応、勤務環境の整備などの支援を得た。本年度の夏期コースも関係者の方々の尽力に支えられて実施されたものであり、こうした協力体制なくして本コースは成り立たなかった。ここに改めて深く感謝の意を表する。

付記 8月末をもって事務局スタッフの田中純子氏がIUCを退職されました。長年にわたり本夏期コースの運営を支えてくださったご尽力に、深く感謝申し上げます。

注

- 1 本年度においては、アメリカ合衆国政府によるビザ政策を入学辞退の理由として挙げる事例が数件あった。
- 2 担任は、IUCレギュラーコースの常勤講師1名、非常勤講師4名、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（University of California, Los Angeles）所属の講師1名の計6名で構成された。副担任については、常勤講師3名、非常勤講師1名、国内外の他大学に所属する講師4名を含む、計8名である。本夏期コースは、新任の常勤・非常勤講師が教育経験を積む場であると同時に、他大学所属の講師との交流を促進する機会としての役割も果たしている。
- 3 IUCでは、授業開始後、講師や事務局からの連絡、受講者同士の会話、授業内での説明に加え、課外活動に至るまで、すべてのコミュニケーションが日本語で行われることが原則となっている。この「日本語のみ」ルールについては、受講者からも言語運用能力の向上に貢献するものとして高く評価されており、学習効果の面でも一定の成果が確認されている。一方で、自由記述には、以下のような実用面からの指摘も見られた。例えば、「知らない単語を質問する際には、日本語だけでは理解が難しいと感じた」「クラス外や課外活動においては、状況に応じて英語を使った方が効率的であった」「他の受講者と自然な人間関係を築くうえで、日本語のみという制限が壁となった」といった声である。こうした意見は、学習環境の実際を反映したものであるが、本コースの学習目標および学習効果の観点から「日本語のみ」の原則は引き続き維持すべきであると考えられる。
- 4 Pコース（Professional Tutorials）は研究者や大学院生を対象にしており、研究目的やキャリア目標に応じた高度な日本語指導を個別に提供している。年間を通じて開講されており対面またはオンラインで受講することができる。

共通教材

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター編（2024）『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』ジャパンタイムズ出版

参考文献

- 佐藤有理（2023）『2023年度夏期コース報告』『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第12号 pp.46-60
 <https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2023_SatoAri.pdf>（2025.8.15閲覧）

加藤陽子 (2024) 『2024年度夏期コース報告』 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第13号 pp.46-63

<https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2024_Kato.pdf> (2025.8.15閲覧)

資料1：IUC Summer Program 2025 全体予定表

6	19	木	プレイスメントテスト 主任／副主任オリエンテーション
	20	金	始業式 IT／事務局オリエンテーション クラス別オリエンテーション・避難訓練 歓迎会
	23	月	通常授業（午前のクラス10:00 - 11:50、午後のクラス13:00-14:50）
	24	火	通常授業
	25	水	通常授業
	26	木	通常授業
	27	金	午前：授業 午後：講演会（中村梅彌氏）
	30	月	通常授業
7	1	火	通常授業
	2	水	通常授業
	3	木	通常授業
	4	金	午前：建長寺（座禅体験） 午後：クラス別鎌倉散策
	7	月	通常授業
	8	火	通常授業
	9	水	通常授業
	10	木	通常授業
	11	金	通常授業（中間試験含む）
	14	月	通常授業
	15	火	通常授業
	16	水	通常授業
	17	木	通常授業
	18	金	午前：授業 午後：専門別活動
	21	月	休日（海の日）
	22	火	通常授業
	23	水	通常授業
	24	木	通常授業

25	金	午前：授業	午後：クラス別活動
28	月	通常授業	
29	火	通常授業	
30	水	通常授業	
31	木	通常授業	
8 1	金	午前：授業	午後：クラス活動
4	月	通常授業（期末試験含む）	
5	火	卒業発表会	
6	水	面接・修了式	

資料2：IUC Summer Program 2025 卒業発表会全題目（順不同）

ただの翻訳じゃない：ローカライズの世界へ
ボーカロイド現象の研究の進展と今後の課題
芸術の遊戯、純粋な革命：瀧口修造の超現実主義について
戦国時代の終わりと三英傑
鎌倉時代における日中仏教文化交流
アイヌと日本人における歴史的関係
ゆるキャラの経済効果
横浜の英語系ビジン日本語
塩鉄論における財富観
日本の現代思想：東浩紀とポストモダン文化
オーバーツーリズムと観光公害：外国人と日本人をめぐる言説
藩閥と受動的な革命：日本の近代化と藩閥の影響
多読：読むのは楽しい
ろう者の学びを支える教育システムと課題
満洲のダンスホール
日米の土地利用
スーパー歌舞伎
北アイルランドにおける実地研修
心の病の再考
日本のスキーの歴史と産業の進化

なぜ日本政府は被爆者の証言を求めているのか
水俣病と日本文化
日本文学に見られる異文化
19世紀の韓国における媒酌人の役割
オタク女子が天下国家を語る：『ヘタリア』の中国語二次創作から見たナショナリズムとジェンダー
夏目漱石『坊っちゃん』はなぜ「無鉄砲」なのか：明治文学にみる時代の連続性
江戸の夏の風物詩：怪談歌舞伎
なぜ韓国で「日流」が起こらなかったのか：2000年代J-popについて
日本の植民地主義と日本統治下における沖縄人の経験
植民地期におけるユン・チホ（尹致昊）の思想と現実認識に与えた儒教の影響